

研究課題 (テーマ)	English Challenge														
研究者	所属学科等	職	氏名												
代表者															
中 崑 崇	教養教育センター	准教授	中 崑 崇 碓氷 エリザベス												
研究結果の概要															
<p>昨年度は English Challenge の一環として①English Chat、②English Camp そして③院教育を見据えた教養・専門連携事業を行なった。以下に概要を示す。</p> <p>1. English Chat</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>実施回数</th> <th>参加者数</th> <th>平均参加者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成30</td> <td>105</td> <td>425</td> <td>4.0</td> </tr> <tr> <td>令和1</td> <td>131</td> <td>491</td> <td>3.7</td> </tr> </tbody> </table> <p>昨年度は実施回数を大幅に増やし実施した。参加学生間では Chat が大学の一つのコミュニティとして機能するようになっている。また留学生が多いこともあり、英語だけでなく異文化理解にも大いに役立っている。非常勤の先生方もボランティアで多く参加して下さり、より多彩な展開が可能となった。</p> <p>2. English Camp</p> <p>11月16～17日に割山森林公園天湖森のキャビンを借り、県立大学を出発し翌日帰ってくるまでのほぼ24時間を全て英語を使って過ごすという「集中英語演習」の取り組みである。</p>  <p>参加学生の多くは Chat の常連でもあり、英語で話すことには全く心理的抵抗がない。そのため「使うことは学ぶこと」、「間違い・失敗は宝」が実践できた。ここでも非常勤の先生方がボランティアで参加して下さり、学生にとってはとても良い刺激になったと考える。</p> <p>3. 教養・専門連携事業 一院生の英語教育を中心に一院生が国際学会で発表する際利用できる PP 用テンプレートを作成する取り組みである。まず専門教員が自身の研究内容を部外者でも分かるような形で、当該分野で行われる発表の標準的「形」を保ちつつスライド化する。その際スライドの説明文も英語で書く。その後ネイティブの講師と協議しつつ英文の添削・校正を行い、完成したらそれをネイティブの講師に録音してもらうという流れである。学生はスライドと音源を自分の研究発表のための練習教材・雛形として利用するのである。昨年度は英文の添削・校正段階まで進める事ができた。</p>					実施回数	参加者数	平均参加者数	平成30	105	425	4.0	令和1	131	491	3.7
	実施回数	参加者数	平均参加者数												
平成30	105	425	4.0												
令和1	131	491	3.7												
今後の展開															
これらの取り組みは授業で習ったことは授業の外で使い、使って浮かんだ疑問は授業で解決する循環型英語環境整備として行なっている。今後は学部1年次から院まで内容を充実させつつ関連させ、学生が楽しく学べるようにしてゆく計画である。															